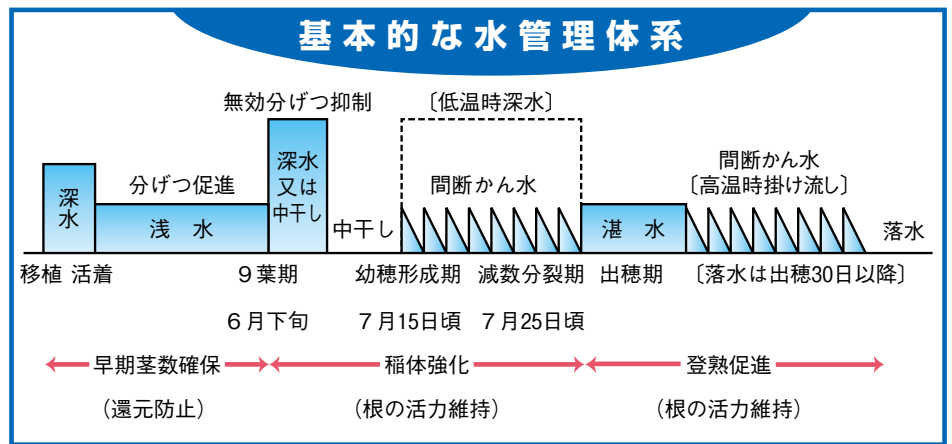


## 健苗移植と水管理の徹底で活着の促進を！

### 1 田植え作業とその後の管理

#### ① 田植えから活着まで

- 田植え作業は、日平均気温14℃以上（中苗）、できれば最高気温20℃以上の温暖な日に行います。最高気温15℃以下の低温時や強風の時は見合わせましょう。
- 田植えの時期は、安全出穂期内に収穫するように決めます。好適出穂期は、出穂後40日間の積算気温で880℃の得られる時期となります。
- 山本地域において、日平均気温が14℃以上になる時期と出穂後の積算気温を勘案すると、平年値では5月15日～25日頃が田植えの適期であるため、作業が極端に遅れないよう注意してください。
- 植え付け本数は4本／株程度とし、3cm以上の深植えにならないようにします。



- 苗の活着には4～5日かかり、気温・水温が高いほど早くなります。田植え直後は活着を促進させるため、水深4cm程度の湛水状態を保ち、保温に努めましょう。

#### ② 分けつを促進させる水管理

- 高品質・良食味米の生産においては、強勢分けつの確保が重要です。
- 分けつは、日平均水温23～25℃、日気温較差が大きい場合に発生が促進されます。
- 活着後は、「早朝かん水・日中止水」を基本に、気温が15℃以上の場合は浅水管理としましょう。また、気温が15℃以下の寒い日は深水管理としましょう。

#### ③ 雑草防除

斑点米カメムシ類は、着色粒発生の原因となり、米の品質低下を助長します。県内の主要加害種であるアカスジカスミカメは、カヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し、増殖するため、水田内雑草の防除を徹底しましょう。

- 発生草種および雑草の量に応じた薬剤の選択と適切な使用により、効果的な雑草防除を行いましょう。
- 除草効果を高めるため、一発処理除草剤を単用する場合は代かき日から10日後までを目安に使用します。処理時期が遅れた場合は、草種に応じて中・後期剤を適切に散布します。
- 除草剤散布時の水深は、粒剤では3～5cm、フロアブル剤やジャンボ剤、豆つぶ剤等では5～7cmとし、薬剤が拡散しやすいようにします。
- 除草剤散布後7日間は止水とし、排水路への落水やかけ流しはしません。田面が露出すると効果が低下するため、水が少なくなってきたらゆっくりとかん水します。
- 水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前の初期剤の使用は極力避けてください。やむを得ず移植前に使用する場合、使用時期は移植7日前までとなります。